その２（H25.3号掲載）

穏やかな時代から抗争の時代へ

前回は片上地区での人々の生活の始まりをお伝えしましたが、その後人々の生活はどのように変化していったのでしょう。

四方谷町を通る県道の地下 4mには縄文時代の終わりごろ（約 3000～2500 年前）の四方谷岩伏遺跡が眠っています。木の実の水さらし場跡で縄文人の食糧貯蔵庫とでもいうべき場所でした。発見されたトチの実は縄文人がさっき浸けたばかりではないかと思うほどツヤがあったといいます。じっくり時間をかけてアクを抜き食べやすいようにしたのでしょう。このように大変穏やかな時間が片上の縄文人社会には流れていたと思われます。しかし、この頃北部九州に渡来人とともに稲作が伝わり弥生時代が始まります。飢えにおびえない安定した生活をもたらすはずだった“コメ”は、皮肉にも階級社会を生み出し、人々は争いに巻き込まれていきます。

四方谷町岩伏遺跡から発見された「トチの実」